# 永い夜

昭和五十年六月十二日　第一刷発行

著　者　立原正秋
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は、おとりかえいたします。

© Masaaki Tachihara 1968
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。　(文1)

# 目次

渚通り　7
狂い花　65
曠野　109
双頭の蛇　155
永い夜　197

装幀＝三田恭子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 永い夜

# 渚通り

# 一

部屋は五つある、と遣手(やりて)ばあさんは言った。女が五人いるとは言わなかった。
五つの部屋というのは、天上の間、落ちる間、ローリングの間、迷いの間、優しさの間のことだった。
「どのお部屋になさいますか？」
遣手ばあさんは紙にしるした五つの間の名を見せながら訊いた。女を見ずに部屋の名前できめるのがこの家の掟だという。
「その最後の優しさの間にしようではないか」
矢代(やしろ)は優しい女を想像しながら考えた。
「あいにくとこの部屋はただいまふさがっております」
「それでは、迷いの間にするか」
「いいえ、あなた、ここもいま迷っていらっしゃるお方でふさがっております」
「ではローリングの間にするか」

「この部屋はいいですよ。なにしろ、うねりますからね。でも大船にのったつもりでいていいですよ。きっと御満足なさいますから」

矢代は遣手ばあさんに従いて廊下を歩いて行った。ばあさんは三つ目の部屋の前でたちどまり、戸をあけると、どうぞ、と矢代をなかに押しこみ、戸をしめた。

矢代は、殺風景な娼婦の部屋を想像していたのに、意外にもそこは色彩に充ちていた。ベッドにうつ伏せになって寝ていた女がこっちをふりかえった。童顔で、色の白い女だった。

矢代はローリングの間を出て八月の陽ざかりの午後の海岸通りを歩きながら、遣手ばあさんは正確なことを言ったものだ、と感心した。ローリングの間の女は、彼の質問に答えて、五つの部屋につけられた名前の故事来歴を語ってくれた。

それぞれ由緒があるのよ、と女は言った。

落ちる間は、そこに入った男は奈落に落ちこむ極限境を味わうとのことだった。天上の間では、かつて腹上死した年老いた船員がいたそうである。迷いの間は、その部屋の天使の色香に迷ってしまい、なかなかそこから出られないとのことで、優しさの間は、その名のように優しい天使がおり、ローリングの間は、遣手ばあさんの表現がそのままあてはまる部屋だった。

港街で、船員は船からあがるとまっすぐ曖昧宿に散って行くので、どこでも昼間から商売をしていた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二週間ほど過ぎた頃、矢代はまたその秘密の曖昧屋にでかけた。
雨の日で、なんとなく人肌恋しい午後だった。傘をさして海岸通りを歩いていると、もう土用波がたっており、つよい潮の香が漂ってきた。
遣手ばあさんは矢代の顔をおぼえており、今日もローリングの間になさいますか、と訊いた。
「今日も優しさの間はふさがっているのかい？」
「いいえ、今日はあいております。かえてみるのもまた面白うございますよ。ここもきっと御満足なさいますよ」
そして案内された部屋は、ローリングの間にくらべると飾りけがなく、そこには、まだ少女のおもかげをとどめた女がいた。
女は、右腕の上膊部に、

十九の春

と篆書体で刺青がしてあった。四つの字は、新聞の見出の字ほどの大きさで、その紅色は皮膚の下で鮮やかに沈んでいた。そして腕には産毛が密生しており、四つの字をぼかしてみせ、矢代は美術品を見ている気がした。十九の春という四つの文字は、直截でなにかしら瀕死の春をおもわせた。
矢代はそれを眺めながら、これが美術品にみえるのは、篆書体のせいだろうか、それと

も、やわらかい産毛のせいだろうか、と考えてみた。
「たいした彫物じゃないか」
矢代は四つの字を指先で撫でながら訊いてみた。
「みんなそう言ってくれるわ」
「十九の春になにかあったのかい？」
「やられたのよ」
「なるほど。やられた記念に彫ったのか。好い男だったのかい」
「それはね」
「きみはいまいくつになるんだ？」
「二十二かな。もしかしたら三かもしれないわ」
女はぶきっちょだったが、優しい心づかいを示した。
矢代が二時間ほどして曖昧屋をでたとき、外はあいかわらずの雨で、昼間から酔いつぶれた船員がびしょ濡れになって歩いていた。

九月に入って間もなく、矢代は、優しさの間の百合子と外で逢った。
港もはずれの方にある漁業会社の罐詰工場が建っている岩壁で、矢代が二時頃そこについたとき、岩壁では数人の男が釣竿をたれていた。風がなく、あたりは淀んだ暑気に静まりかえり、水平線では積乱雲がかたまって浮いていた。

彼がついて間もなく驟雨があった。彼は罐詰工場の入口の守衛室に入れてもらって雨を避けた。雨は間もなく通りすぎ、しばらくして再び強い陽がさしはじめた頃、岩壁伝いに百合子がやってくるのが見えた。水色の洋服に白いハイヒール、そして水色の日傘をさしていた。それは、灰色の風景のなかで一点さわやかな絵だった。

彼が手をあげると、百合子も手をあげ、駈けつけてきた。

「きみは今日は美しいよ」

と矢代は言った。

百合子は顔をあからめ、目を伏せた。純真さがいつまでも消えない女だった。

この日二人が岩壁で逢ったのは、優しさの間では昼夜の別がなく、男を相手にしているとき以外はねむる、といった日常から、海を見たい、と百合子が言いだしたからであった。

矢代と百合子のあいだは冬のはじめまで続いた。なにかととりかえることの出来ないもの、矢代は百合子にそんな感情を抱きはじめていた。百合子が優しさの間に来るまでにどんな過去を背負っているのかは、矢代は知らない。また彼はそんなことを訊きもしなかった。

十二月はじめの水曜日の午後、この日は矢代が検疫官として勤めている市の屠殺場が休日だったので、彼は優しさの間を訪ねたが、百合子はもうそこにいなかった。

「いい男が別荘から戻ってきたのですよ」

と遣手ばあさんが言った。

「いつのことだい？」
「一昨日ですよ。逢いたいんでしたら、渚通りに行けばどこかで逢えますよ。渚の徹と言や、この辺では知らないものはない悪党ですが、百合ちゃん、かわいそうに、そんな男のためにせっせとここで働き、その金でアパートを見つけて越して行ったのですよ」
「そうかい。それでは仕方がないな。では、いずれまた来るよ」
と矢代が曖昧屋から出ようとしたら、
「優しさの間によっていらっしゃいよ。いいたまが来ましたよ」
とばあさんがひきとめた。
「いや、またくるよ」
矢代は外套の襟をすぼめて曖昧屋を出た。

## 二

暮方の五時、渚通りでもいちばん賑やかな通りにあるレストラン花馬車では、アマリリスとガーベラが、注文した夕食を待っていた。アマリリスはその名のように赤い着物をきており、ガーベラは紫色のプリーツスカートに紫色のブラウス、紫色のカーディガンを着ている。
「おそいわね」
とアマリリスがたてこんだ店内を見わたし、となりの席にマカロニグラタンを三つ運んで

きたウェートレスをつかまえ、あんた、はやくしてちょうだい、仕事におくれちゃうじゃないの、と催促した。まわりの人々がいっせいにこの二人の男娼を見ていた。ウェートレスは、はい、かしこまりました、と答えて去った。

「あんた、ゆんべはどうだったの？」

とガーベラがアマリリスに訊いた。

「ぜんぜん不漁よ」

アマリリスは右手の指で髪のほつれをかきあげながら答えた。

「不景気なのかしら」

「そうでもなさそうよ。あたし達、もう、としですものね。あたし、じきに三十よ」

アマリリスはためいきをしてみせた。

「あら、あんたなんかこれからが盛りじゃないの。あたしはもう四十になるわ。どこかに可愛いい情夫(おとこ)はいないかしら」

「別荘から戻ってきた渚の徹はどうなの？」

「あれはあんた、ぜんぜんお百合にきんたま握られてさ、おはなしにならんじゃないの」

ガーベラは両手で握る仕草をしながら話した。

「あんたがお百合のかわりに握ってやればいいじゃないの」

「それがね、あたしも数度はっぱかけてみたけど、靡(なび)いてこないのよ」

ガーベラは嘆いてみせた。

矢代がこの男娼達と知りあったとき、彼女達はすでに色香も失せかけていたが、渚通りではなんといっても粋な存在だった。その年の服の流行をまっさきにとりいれて着こなすのも彼女達だった。わけてもガーベラは洋装の着こなしでは定評があり、彼女には数年も前から渚通りでも一流のデザイナーがついていた。

そのデザイナーはフランス帰りのきれいな女で、渚通りの一角にシャネル五番と名づけた店を構えており、ガーベラはこの店の上客の一人だった。あの奥さんはセンスがある、とそのデザイナーはガーベラを評していた。

十一月の末だったが、ある日の午さがり、シャネル五番に現れたガーベラは、ウインドウのなかの人台に着つけてある黒いスーツに目をとめ、あら、これ、すてきじゃないの！ と服地のいろ、かたち、仕あげのよさをほめた。

「まあ、奥さまのお目のはやいこと」

デザイナーは相好をくずし、このスーツは奥さまを考えてこしらえたのでございますのよ、とつけ加えた。

「あら、それでは、あたしにぴったりというわけね」

「そうでございますのよ。ちょっとお召しになってみてくださいませ」

「あんたのフランスでの先生はなんと言ったっけ？」

「ピエール・カルダンと申します」

「あんたのつくる服のような名前ね。いいわ、この服もらって帰るわ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com